

学位論文題名

Embracing America:
Female Bodies and Literary Postcolonialism

(越境と包容：現代アメリカ女性文学における身体とポストコロニアリズム)

学位論文内容の要旨

多文化を背景とする現代アメリカ女性作家たちは自己およびコミュニティを投影した自伝的な特徴を持つ作品において、身体を利用して越境的なアイデンティティの形成を表象してきた。彼女たちによって描かれる主体的な身体は、想像、創造、記憶に特徴づけられ、また、抵抗、越境、統制の場となっている。ポストコロニアル文学研究者 Ketu H. Katrak は、第三世界の女性作家作品の脱植民地化のプロセスにおける身体の戦略的な利用を検証した。また、Katrak は文化的帝国主義を批判し、ポストコロニアルな女性の文学的伝統が、性差による不平等と支配に抵抗し、社会変動に向けて想像的で戦略的な努力により連帯を実現し、文化と政治の再定義に影響を与えたと主張している。本論文は Katrak の研究から着想を得て、多様な文化的差異に注目し、1960 年代後半からの現代アメリカ女性作家たちの自己およびコミュニティ表象をテーマとする作品における身体の戦略的利用と自己形成について考察している。これらの周縁の女性作家たちの創作における試みが、単一的な「アメリカ」の概念を相対化し、また、アメリカにおけるポストコロニアル女性文学の伝統の構築に寄与するものであることを検証する。

本論文は 1960 年代以降、時代順に 8 人の作家による 8 章の構成となる。第 1 章では、Anaïs Nin の生前出版の日記作品 *The Diary of Anaïs Nin* (1969) と死後出版日記における妊娠経験を比較検討することにより、創作による自身の身体とアイデンティティへの神話化について考察している。彼女は生前の日記形式作品において自己を神秘的に描き、自立した女性像を創り上げ、第二波フェミニズム運動家たちに支持された。創造的な女性の身体経験の探求と自己表象をテーマとした Nin の作品が、その後の女性作家たちの自己表象の創作の道を開いたことを説明する。

第 2 章では、Gloria Anzaldúa の *Borderlands/La Frontera* (1987) における越境的な身体とアイデンティティの表象とエスニシティを背景とする神話化について検証する。Anzaldúa は多言語を使用し、逸話、散文、詩の形式を混ぜた実験的なファンタジーの特徴を持つ自伝的作品を出版した。この自伝的作品の成功により、彼女は第三波フェミニズム運動の時代の有色人女性運動に大きく貢献し、彼女が創作を通じて呼び掛けた連帯を実現した。これらの業績を彼女の越境的な身体と自己形成の表象によるエスニックな神話化の成功として位置づけた。

第 3 章においては、Lois-Ann Yamanaka の *Wild Meat and the Bully Burgers* (1996) におけるハワイの日系

アメリカ人少女の自己形成を身体、階級、白人性、ハワイ文化の影響との関連に注目して考察する。作品中の女性身体は、血と死のイメージに特徴づけられるなどスティグマ化され、少女の身体に対する肯定的な受容を困難にしている。少女の葛藤と成長から、文化的差異による身体意識とそのアイデンティティ形成への影響について考察する。

第4章では、Edwidge Danticat の *Breath, Eyes, Memory* (1998) においてハイチ系女性の身体に注目し、暴力と病、および、身体への統制を取り戻すための内潜在的な抵抗について検討する。作品に描写される第三世界における家父長制的慣習と意識が女性の身体と精神に与える影響や女性に関わる身体の問題について検討する。少女は身体の問題に向き合い、ハイチの悲劇的な歴史を知り、語り手としての役割を肯定的に再発見する。少女とその母の抑圧状態からの脱出と自己保存の試み、ハイチの記憶の再発見とアイデンティティの再構築の試みについて考察する。

第5章では、Sandra Cisneros の *Caramelo, Puro Cuento* (2002) における幽霊と口承歴史(oral history)による記憶に注目し、身体の利用とアイデンティティ形成を考察する。主人公の少女は祖母の幽霊との交流を通して、家父長制的抑圧の影響を意識し、祖母や母とは異なる生き方を求める。幽霊の身体は不可視化されてきたメキシコの女性の歴史を語るために利用されていること、また、ステレオタイプ的に位置づけられるメキシコ人の多様性を主張し、語り手としての主体性を得るなど少女の新しい自己の獲得について検証する。

第6章では、日系アメリカ人作家 Lee Ann Roripaugh の自伝的詩作品において記憶、身体、民話に注目し、ディアスポラな自己について考察する。Roripaugh は日本人とドイツ系アメリカ人のハーフである自身のハイブリッドな身体を蛇や海中の移動性の動物などに自身を投影し、想像的な表象をしている。身体とアイデンティティの日本人性の文脈への位置づけ、日本の昔話の語り直しを検討し、Roripaugh のディアスポラな自己形成の表象を説明する。

第7章では、Jhumpa Lahiri の *The Namesake* (2004) からインド系の登場人物男女の人種とジェンダーの問題に特に注目し、ディアスポラの自己形成について考察する。女性登場人物たちは越境と疎外の状態にある自身の身体にコントロールを取り戻す試みを積極的に行う一方で、2世の男性主人公は、インドの文化とアメリカの主流文化の間で葛藤し、さらなる紆余曲折を経験する。1世と2世の登場人物男女たちのアイデンティティの再構築を検討し、「アメリカ」との関係性について考察する。

第8章では、Aimee Phan *We Should Never Meet* (2004) においてベトナム戦争孤児に焦点を当て、政策により戦後アメリカに移植された孤児たちの自己形成について検討する。自己の構築に関わり、アメリカの家族との関係や養子や里親などの受容と成育歴の違いの影響、また、孤児たちの混血性と身体的疎外に注目する。作家の現代のアメリカにおけるベトナム系コミュニティの表象を、集団的忘却への抵抗と記憶の共同体の構築の試みとして位置付ける。

以上のように、20世紀後半以降の現代女性作家たちは、多様で越境的な身体とアイデンティティを提示することにより、新しい「アメリカ」を描出し、既存の概念を周縁から相対化していると考えられる。これらの女性作家たちの創作の試みは、アメリカにおけるポストコロニアルな現代女性文学の伝統を構築し、現代アメリカ文学の再定義に寄与するものであると結論づけた。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 瀬名波 栄 潤
副 査 教 授 高 橋 英 光
副 査 准教授 竹 内 康 浩

学 位 論 文 題 名

Embracing America: Female Bodies and Literary Postcolonialism

(越境と包容：現代アメリカ女性文学における身体とポストコロニアリズム)

審査経過は以下のとおりである。

平成 22 年 12 月 17 日	審査委員会発足
平成 22 年 12 月 17 日	第 1 回審査委員会 論文の配布と審査日程の調整
平成 23 年 1 月 7 日	第 2 回審査委員会 論文内容の検討と問題点の整理
平成 23 年 1 月 21 日	口頭試問の実施
平成 23 年 1 月 21 日	第 3 回審査委員会 口頭試問の内容検討と評価、学位授与の判定
平成 23 年 1 月 25 日	第 4 回審査委員会 審査結果報告書（案）の検討と確認
平成 23 年 1 月 28 日	第 5 回審査委員会 審査結果報告書の確定

審査要旨

本論文は、現代アメリカ女性作家の自己およびコミュニティ表象作品において身体は創造的な想像の場であり、越境文化的な差異の折衝の場と位置付けている。現代フェミニズム批評の肉体的差異に意味を付与する知としてのジェンダーの議論において、生物学的性差の克服のためにしばしば身体は抽象化され、実体としての「女」および女性たちの「生身の現実」や身体の直面する具体的な問題は見過ごされてきた。しかし、本論文ではアメリカの 1960 年代における女性運動以降から現在まで多くの多文化を背景とする女性作家たちは、この流れに反して自己およびコミュニティを投影した作品の登場人物のアイデンティティ形成の表象において、「女性」と同様に周縁化されてきた「身体」を戦略的に利用してきたことを説明している。

この「戦略的本質主義」(G. C. Spivak) としても考えられる女性作家の積極的な身体の描写において、身体は多様に表象され、想像、創造、記憶、連帯の力がイメージされ、また逸脱と抵抗および統制の場になっている。登場人物たちは、自己が抱えるそれぞれの追放や疎外などの周縁化に対し、身体におけ

る創造により、想像上および実体的な境界の越境を実現していると考えられる。これらの作品から多様な越境に特徴づけられた身体とアイデンティティ形成の表象を検討することを通じて、20 世紀後半の女性作家たちの創作の試みが、周縁から現代アメリカ文学の再定義に寄与し、アメリカにおけるポストコロニアルな現代女性文学の伝統の構築していることを検証する意欲的な研究である。

本論文の対象作品は 1965 年の移民法改正以降に多数が移民し、「New Americans（新アメリカ人）」と呼ばれるエスニック・コミュニティを背景とする現代アメリカ女性作家たちの作品を含む。彼女たちの作品は、近年アメリカの中学校・高校をはじめ、アメリカ研究科の大学院における授業において積極的に取り上げられ、注目されているがまだ研究は多くはない。これらの現代女性作家たちの試みは、これまでアメリカの歴史において不可視化されてきた人々、また、検討されてこなかった「アメリカ」を描出している。また、現代女性作家たちの自伝的な作品におけるアメリカ人としてのアイデンティティ形成とコミュニティに関わる研究は、現代アメリカを考える上においても重要性の高い研究だと考えられる。この研究はマクロ的な視点による量的研究からは見えてこない、現代アメリカ人の姿を映し出し、アイデンティティの諸問題を浮き彫りにする事例研究でもあるといえる。ただ、女性作家の脱中心化を肯定する読みは新たな中心を構築する自己矛盾もしくは自己否定的行為であるとも言える。この傾向はフェミニズムやポストコロニアルの批評全体が抱える問題でもあるが、申請者にはこのようなパラドックスを十分認識し批判的に検証することが今後の研究課題と言えよう。

本研究は、1965 年の移民法改正以降により多元化を深める移民文学についても単一的に捉えるのではなく、21 世紀における帰属意識の不在に特徴づけられていく「アメリカ」との関係性など、変化の様相を明確に提示する内容になっている。いくつかの検討すべき点が見られるものの、現代アメリカ文学研究に新たな貢献をする試みとして、十分な成果を得たと評価することができる。なお、本申請論文の研究は 3 本の論文が査読付きの学会誌に掲載されている。また、アメリカにおいて学会発表 1 回、国内では全国大会およびシンポジウムでの発表を含む計 5 回行い一定の評価を得ている。

審査結果

本審査委員会は申請論文の慎重な審査と口頭試問の結果に基づき、全員一致して渡部あさみ氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。